

総 括

菊池一隆

I

今回、脚光を浴びている高橋伸夫、笹川裕史、巖善平3氏（以下、他の人々を含めて敬称を略す）に報告していただいたことは、本研究会としても意義あることといえよう。ここで、各報告、及びそれに対するコメントを念頭に置きながら総括するのが私の役割である。3報告の共通性は主に農村、農民にウエートを置いていることである。中国を考える際、広大な地域と圧倒的人口を有する農村、農業、農民を捨象できないことは言うまでもない（元来、農民人口は一般的に70～80%と称されてきたが、巖によれば、農村53%、都市47%であるという）。このように、第2次産業、第3次産業など肥大化とともに都市の吸引力が強まり、急激な都市人口の増大が見られる。「初期社会主義段階」と称する中国での大胆な改革開放政策の結果、都市問題を誘発すると共に、その歪み、格差の増大は農村に如実に示されているとあって過言ではないであろう。このように考えると、中国を理解する上で、農村問題は捨象できないことは言うまでもない。また、3報告は現代中国を歴史的な革命、戦争、及び近代化から問い直すと言う。このことは、とりもなおさず三方向から現代中国とは何かを考察することになる。

ここで、3報告の交通整理をすると、以下のようになる。

(1) 焦点は、高橋が民衆、笹川が政策と民衆、巖が政策となる。時期的には高橋が1920、30年代前半で、国共矛盾が優先され、ナショナリズムが後景に退いていた時期、次いで、笹川が40年代後半で、日中戦争が終わり、抗日ナショナリズムを喪失した国共内戦期、そして、巖が人民共和国成立以後、特に経済成長に支えられ、国威発揚が叫ばれ、他方で農村・格差・少数民族など内在的な諸問題を抱える現在を対象としている。

(2) 地域的には、高橋が鄂豫皖、特に閩西（福建省西部）、笹川が四川省であるが、重慶ではなく成都である。巖は政策史であり、いわば中国全土を対象とし、農村と都市の共通性と差異を明らかにしながら、中国現政権自体が「都市・労働者中心の政権」であり、「労働者の同盟軍」と位置づけられた農民・農村の地位は元来、低かったと指摘する。

(3) 前二者がミクロ、後一者がマクロ的視点からのアプローチといえる。特に前二者が主体となっている者たちの動向、建前と本音、うめき声を引きずり出した。日本近現代史では、こうした切り口は少なくないが、中国近現代史では、新たな動向を示す研究といえ

る。今後、各地域に密着したこうした研究は数多く出てくる可能性があり、その点では先駆的役割を果たすことになる。特に高橋は、階級、両性、世代各問題という絡まる糸を解きほぐすことに挑戦した。また、巖は農業政策の展開から新たな中国像の構築を目指す。

(4) 国共に関しては、中共が高橋、巖、国民党に関してが笹川である。この問題で常に浮上するのは同時代の下に存在した国共両党の共通性と差異であろう。最近、研究の一般的状況としてどちらかみの史料、事実を拾い集め、ある側面を過度に強調する傾向があるが、私見によれば、共通性だけを強調しても、差異だけを強調してもその本質は突けない。同時代であるが故の共通性、及び差異を正確に押さえ、それぞれをいかに位置づければよいか緻密、かつ深く考察する必要がある。その他、伝統（もしくは旧来からの思想・慣習・生活などを含む）と革命を梃子に、1949年革命の連続と断絶のみならず、1920、30年代の連続と断絶をも考えさせる。

II

では、各報告のそれぞれ内容、特色、及び意義と疑問点を提起したい。

第一報告は、高橋伸夫「党、農村革命、両性関係—中国革命と伝統社会の変容に関する一考察—」である。高橋独自の世界を展開し、大変面白い報告であった。従来の研究の枠を飛び越え、インパクトは強い。ただし、報告の前、私は高橋の著書『党と農民—中国農村革命の再検討—』を読んだが、同じタッチで、重複も多く感じられた。本報告は、結局、著書にどの点で修正、補強を加えたのか、どの面で前進し、研究を深化させたのか、よく分からなかった。報告の際、それを明らかにしていただければ、著書をすでに読んだ者にとっても論旨が明確になり、分かりやすかったのではないか。

主要な質問、疑問点などは以下の通り。

(1) 鄂豫皖、閩西両根拠地に主に焦点を当てているが、全国の幾つかの根拠地の中で、何故この両根拠地を選んだのか。全国の根拠地における両根拠地の位置づけはどうか。その特殊性と普遍性はどうか。この点が必ずしも明らかではない。また、「国民党支配地域と共産党支配地域を対照的に描きがち」とするが、これに関しては大筋で異論はない。では、具体的に国民党地区と中共地区の共通性は何か。それを明示すべきであろう。また、閩西の元来からの思想・政治・経済状況、及びそれとの関連も重視する必要がある。なぜなら同地は華僑の出身地に近く、他地域以上に思想的に開明的であった可能性があるからである。その上、それまでの状況と、革命を契機とする変化、もしくは連続を明確に浮かび上がらせることができるからである。

(2) 本報告は女性解放問題に力点を置いている。そして、女性解放を階級闘争に隷属させていると主張する。やはり女の問題を一元的には論じられず、担い手の問題が浮上し、職業、階層、教育水準などもかかわる。その点、高橋は「富農排除をその階級の女がおこ

なうとは考えにくい」とし、高橋は世代間闘争を強調しながらも、女たちの間にも所属階級の異なる女同士の闘い、階級闘争がかなり反映していることを意識的にしろ、無意識的にしろ認めている。また、同世代でも夫の父母、特に母、それに対する妻の父母、特に母の間での意見の共通性と差異があるのではないか。高橋は手堅く乱婚問題にも言及する。換言すれば、結婚、離婚、結婚、離婚を繰り返す女たちの男獲得競争ともいえる。高橋によれば、未婚の比較的若い男の党员、共産主義青年团员（これには女も参加しているはずではないか）が「解放を求める」女たちに賛成しているという。結果として、私生児の増加が増大し、死亡する私生児も出てくるという興味深い事実を指摘する。「党機関の責任者の4分の3が数十人、数百人の女性と性関係」をもったとするが、こうした書き方は女の主体性を否定している。高橋は女が能動と強調しながらも、結局のところ、男が能動、女を受動のように描いているのである。ここに論理の矛盾はないのか。当然のことながら女側から見れば、数十人、数百人の男と性的関係を結んだ可能性が強いことになる。ここで、私は現在の感覚で、「性の乱れ」や「腐敗」を論じるつもりは毛頭ない。毛沢東の言をかりるまでもなく、元来、自由恋愛のみならず、「乱婚」も「革命的」と見なされていたのではないか。また、閩西のことはわからないが、都市や他地方の共産主義者や青年などが流入していたという事実はないのか。かくして、多くの文化・思想摩擦も生じていた可能性もある。そうした脈絡から考察し直す必要があるのかもしれない。よくよく考えてみると、元来、地域によって異なるであろうが、ある意味で中国農村は多夫多妻、一夫多妻のルーズな社会であり、閩西にも元々性的な自由があったのではないかという気もしてくる。となると、伝統と革命の相乗作用と言うことになる。

なお、報告者の一人、嚴善平から「女よりも食糧のためではないか」との質問がでたが、この側面は私も否定できないと考えている。最も不可欠な生命維持という基本的問題であるからである。当時、いわば喰うために革命や戦争に参加するという歴史をもっている。

第二報告は笹川裕史「銃後社会の終焉とその遺産—49年革命前夜四川省の社会動態—」である。奥村哲と出した『銃後の中国社会』で四川中心に徴兵逃れの実態などを論じている。本報告はその続編とも言えるものであるが、やはりその前提に四川省の特殊性と普遍性の双方をさらに明確にする必要を感じた。むしろ本報告の内容から言えば、銃後社会（戦争）の継続という感があり、「終焉」しておらず、「遺産」とはいえないのではないか。そうした素朴な疑問を持った。内容的には、徴兵逃れ、軍糧略奪、都市の食糧問題、さらにそれら諸問題を引き継がざるを得なかった中共の問題にまで論及する。その実相をビビッドに書かれており、論理展開も説得力がある。しかし、疑問がないわけではない。疑問点を提起すれば以下の通り。

(1) 四川省を国民党の最後の拠点と見なすことはよいとしても、何故重慶ではなく、成都を採りあげるのか。その説明が欲しい。戦時首都であった重慶と省都の成都是かなり政

治状況が違ふと考えられるからである。つまり重慶と成都は断絶し、異なる特性を有していたのではないか。そして、戦時期と内戦期との連続、断絶を考察する場合、成都より重慶の方がより適切なサンプルで、的確な分析が可能であった気がする。

(2) 内戦期をいかに位置づけるのかという問題である。笹川によれば、国共内戦期は抗戦期によって創り出された、よりひどい状況とする。「日中戦争時期、食糧徴発など無理な抗戦体制を構築した結果、四川は深刻な亀裂が走った」、「四川には中共基盤がなく、その勝利に四川省問題は直接関係はない」と説明したが、これだけでは内戦期の位置づけがもう一步分からない。奥村哲の場合、日中戦争の総力戦体制を人民共和国にダイレクトに繋げ、内戦期を軽視しているようにも感じられる。内戦期に関する笹川と奥村の見解の相違を聞きたいところである。1945年、49年には、私見によれば、連続と断絶の双方があると考えられ、どちらが本質を規定しているのか緻密な分析が必要かもしれない。

(3) 1949年人民共和国成立の直前には、国民党の支配力はほとんど減退していたとする。おそらくそうであろう。ところで、徴実、徴借では、四川省全体の問題を論じている。これには重慶が入っているのであろうか。軍糧問題を含む省内消費率と省外消費率の問題も残る。私はこうしたことを論じる場合、少なくとも、その背景となる食糧の増減統計が必要不可欠と考えている。なぜなら、食糧が豊作の時と、減収、もしくは凶作の時では同じ税率率でもその負担に大きな差異が生じるからである。結局、内戦期を通じて各年毎の食糧生産高はどのように推移したのか。

(4) 史料問題であるが、基本史料とした『新新新聞』は四川軍閥鄧錫侯の二八軍系の新聞であったが、民営化された。反共ではあるが、「成都の代表的な一般商業紙」と説明するが、説明が十分ではない。いかなる形の反共で、どのような商業紙で、読者層は誰で、発行部数はどのくらいなのか。舌鋒は鋭く、単なる「一般商業紙」になったとは考えられず、激化する派閥間の争いに参画していた可能性を示唆する（政学派の主張に近いのではないか?）。報告の際の提出史料にある「官僚豪門」、「豪門」は単なる富豪ばかりではなく、例えば、「CC豪門」、「孔祥熙豪門」などのように使用し、政敵を倒すための政治的概念であったのではないか。となると、ある意味で「官僚資本打倒」と共通の基盤を持っているようにも感じられる。

なお、個人的には「白い三角帽」が興味深かった。高橋報告にもこうしたことが述べられている。「三角帽」は文革期の現象のみならず、それ以前にも国共を問わずおこなわれていたことは注目される。

第三報告は、巖善平「中国における『三農政策』とその転換」であり、三農問題、すなわち農業、農村、農民から中国全体の問題を論じる。いわば政策史、特に農業政策史であり、上からの視点といえよう。これらを論じながら、工業と農業との関連に論及する（掲載論文は農村・農民調査でミクロ的問題であり、いわばその中間が抜け落ちている）。

(1) 地域間格差などによる農村の多様性があまりに捨象されている。農村といっても、沿江海の農村、大都市周辺の農村、中間地帯の農村、地方都市周辺の農村、遠隔地の農村等々、全く異なるのではないか。地域差も重要であり、華中南、華北、東北を網羅的に論じることはできない。出している統計も全国的なもので、地方統計も併せて出すべきではなかったか。確かに沿海、内陸での生産効率に触れてはいるが簡単すぎて、説明不足といえよう。こうしたことを考察する上で、流通問題も重要であるが、ほとんど触れられていない。流通問題を水路、道路、貯蔵など、多面的に分析する必要があるが、できれば具体的統計を出す必要があったと思う。

(2) 中国内における市場原理、利益の配分問題、及び食糧生産と農家収入の安定について論じる。だが、この問題は、中国だけでは分析できない。中国全体の自給率はもちろん、少なくとも主食、副産物など、それぞれの自給率に論及する必要があったのではないか。連動するものとして輸出入の問題がある。輸出により中国内の食糧は減少するが、逆に、例えば、東南アジアからの米、オーストラリアの牛肉などの輸入を看過できず、これによって食糧は増大する。また、中国農業に対する財政、金融の支援はどうなっているのか。それも具体的金額を明示し、各地における食糧生産の効率化がどの程度進んでいるのか否か知りたいところであろう。各種農業法令にみる三農政策では、法令が単に羅列されているが、主な法令の詳細な説明と重点的な分析が必要であろう。政策体系はほぼ形成されたとするが、どのような形で形成されたのか。これを法令との関連で説明する必要がある。さらに言えば、政策決定過程と政策実施後の影響にも論及して欲しかったということである。華中、東北で食糧生産基地を作り「生産能力の向上と安定化」を図ると言うが、これもまた抽象的である。実際の状況、実際の数字で示して具体的に論じる必要があった。

(3) 2005年3月工業が農業を後押しし、都市が農村を牽引し、「都市、農村間の格差是正」をする方針であり、大転換とする。この点は非常に重要である。今までのやり方と逆であるばかりか、従来の社会主義体制では、農業からの収奪によって工業、特に重工業を發展させようとしてきた歴史がある。これらが効力を発揮しているとするれば、いかなる形で効力を発揮しているのか。また、第11次5ヵ年計画に反映しているとするが、どのような形で反映しているのか。農業税の段階的廃止により、1200億元が農家に残るとするが、おそらく平均的分配ではないはずである。どの地域、業種などいかなる理由で重点配分されたのかも気にかかる。食糧総生産量の増大とするが、地域別、業種別、作物別ではどうか。ところが、農村所得は増大しながらも、都市と農村の所得格差は2002年から縮小していないとする。これは全国的と考えられるが、地域差はどうか。「財政の農業に対する支援が不十分だからなのであろうか」とするが、これではあまりに簡単すぎる総括ではないか。他の要因は考えられないのであろうか。1960～80年農業予算の国家予算における比率は7～10%で、現在と変わらないとする。ただし、国家予算全体の増減、及び物価上昇率を示さなければ、正確な分析はできないと考えられる。

その他、「中国共産党政権の基盤は労働者階級」を久しぶりに聞き、懐かしい思いがした。だが、それは、本当なのであろうか。すでに実態は異なるのではないか。労働者階級の「農民は同盟軍」は原則的に社会主義体制そうになっているが、実際は農民のみならず、労働者もすでに地位的に低下しているのではないか。農民の政治的権利は労働者と同じではないとするが、具体的に法令を含めて共通性と差異を教えていただきたい。

III

三品は、中共の「建国神話」は崩壊し、中共と農民は一致しておらず、「ばらばら」である。にもかかわらず、中華人民共和国が成立した。したがって、中共の最終的勝利をいかに説明できるのかという問題提起をした。この問題提起は重要である。

それに対して笹川は「四川は中共と無関係」とする。いわば国民党自滅論になるのだろうか。また、高橋は1920、30年代の中共根拠地の革命と女性解放、世代間闘争などの実相、「問題点」を論じ、ここから国共内戦における中共の勝利を導き出すことは困難である。さらに敵は中共勝利後、約60年後の現在での農業政策を論じた。いわば国共内戦における中共の勝利が既成事実・自明の理である現在を論じているのである。その結果、三品の発問は笹川を除いて残念ながら空転した。その笹川も真正面から答えたわけではなく、すれちがいに終わった。これらの回答を聞いていると、3報告者とも、報告内容からも国共内戦に中共が勝利した要因にさほど関心がなかったように見える。したがって、三品のこの点でのコメントは報告者、報告内容に則したのではなく、自らの関心に引きつけすぎたため、空振りに終わった感が強い。

とはいえ、確かに中共の「建国神話」として中共地区がかつては理想的に描かれてきた。理想的に書かれた史料、伝聞、回顧録に依拠して書かれ、それに反する内容を捨象してきたからである。情報制限で、史料入手が困難で、やむを得ない状況もあった。これに対して、現在、史料開放と共に入手しやすくなった史料や档案史料などを駆使し、実態に即した研究が進んでいる。その結果、革命根拠地、さらに抗日根拠地という中共地区における混乱と人間くさい部分が次々と明らかにされている。これは、ある意味で間違いなく研究の進歩だ。だが、そうした史料を集中的に探し、収集し、それらに基づき描いているという面も否めない。換言すれば、それを否定する史料などを意識的、無意識的に捨象する。おそらく、いわゆる「建国神話」も一面の光のみに焦点を当てた結果、局部の事実を描きながらも、多くの影の部分の捨象した不十分なものであった。同様に、現在は人間的部分、悩み、混乱に焦点を当て、局部の等身大の事実を次々と明らかにしているが、光の部分の捨象しているという点で同様なのではないか。高橋は新たな断面を摘出し、ある意味で実態に近づいたが、今後は全体の中で一旦総合化し、それを位置づけ直すことも必要なかもしれない。明確に言おう。私は「建国神話」を全面否定するつもりはなく、かつ現在の

等身大研究の重要性も認識しているが、全面肯定するつもりもない。今後、この双方の研究の位置づけを明確にし、それらをアウフヘーベンして再び複雑な歴史の本質に迫る必要があるだろう。

最後に、考えられる展望は以下の通り。

第一に、国民党史、中共史、第三勢力史が切り離されて、そのいずれかに立脚し、もしくは中心として他は付随的に論じられてきた。これは立脚点が明確となり、研究がし易く、歯切れのよい結論を導くことが可能となる。また、自ら苦労して「定規」を創り出すのではなく、何らかの既存の「定規」を求めたがる傾向がある。これでは、怠慢の謗りを免れない。かく言う私も主に国民党・国民政府に立脚して中国近現代史を描いてきた。今後は、国民党、共産党、第三勢力などを同じ土俵に上げ、その拮抗、融合、離反を相互の政治力学の上で明らかにする必要に迫られると考えている。難しい作業であるが、いわば1つの「定規」ではなく、複数の「定規」、それも自ら創り出した「定規」によって構造的に解明し、新たな論理を模索することに挑戦すべきであろう。

第二に、民衆問題について言えば、時期によって戦争、革命、ナショナリズムに熱し、踊り、また時期によっては熱が冷め、もしくは刃を他に向ける。そうした民衆の単純さ、ざる賢さ（卑怯さ）、及び生きるための粘り強さという短所と長所を併せ持つ。異なる民衆ではなく、同じ民衆が両面性を有しているのである。したがって、民衆史を分析する場合は、時期、背景、状況を正確に把握することが前提として最低の必要不可欠な条件となるのである。その後、もしくはその過程で民衆の実態把握が必要なことは言うまでもない。民衆を過度に賛美せず、民衆を単なる被害者として逃げ込ませず（民衆責任の問題である）、民衆を過度に貶めず、両面性を確認した上で、それらをどのように分析するか、実証的に考察する必要がある。もちろん「民衆とは何か」を定義づける必要があるが。

第三に、農業からの収奪問題は古くて新しい問題である。すなわち、ソ連から続く社会主義体制に内在する問題ともいえる。ソ連の工業化論争、バランス論争、重工業優先政策がそうであった。現在の中国でも、工業化のために農民・農村を収奪対象としていると考えてきた。食糧を輸出し、工業などへの投資をおこなっている。農業収奪的構造はある面、変わっていないのではないか。今回の敵報告には満足できなかったが、三農政策を真正面に据え、中国の農業政策の大転換を論じる敵の研究には注目している（ただし、三農政策の研究は少ない）。ところで、文革期に提起された「三大差別」（都市と農村、工業と農業、精神労働と肉体労働の差別）撤廃が解決されることなく、現在でもむしろ未解決の重要問題として存続している。また、重視すべきは、大都市同士の関係、大都市と中小都市、沿岸部と内陸部の各都市の関係のみならず、都市と農村の連動と相互作用、もしくは反発についてである。

第四に、政治と経済・社会の連動の問題である。日本では政治史、経済史、社会史、思想史、運動史などと分類され、細分化されてきた（テーマはさらに細分化し、蜻蛉壺に入っ

たような研究もある)。そして、自ら政治史とか、経済史とか、社会史とか自称し、また他者にもそのレッテルを貼りたがる傾向がある。しかし、これは「取りあえず」、もしくは「強いて言えば」、「〇〇史」ということであり、巨大な中国の複雑さを解きほぐし、深層を掘り当てるには政治史だけでも、経済史だけでも、もしくは社会史だけでも不可能な状態に陥っているのではないか。相変らず自称「マルクス主義者」の私ではあるが、経済が土台であり、上部構造を大きく規制すると考えている。だが、歴史の本質を捉えるには政治、経済、社会の相互作用、相互規制に眼を向ける（政治史も経済的状况に配慮せざるを得ず、経済史も政治的背景を無視できない）段階に入ってきていると考えている。あくまでも専門が「〇〇史」というのは手段であり、テーマによっては相互乗り入れする必要があり、目的はあくまでも歴史の本質を極めることにある。

なお、シンポジウムの際、阿古の厳報告に対する質問は、①2002年税制改革により中央から地方へと移譲されたが、中央と地方の関係に変化は見られるのか。②法律の改定による農民保護は農民工への保護に連動するのか。④新農村建設による食糧の確保などであった。阿古とは異なる点もあるが、厳報告に私なりの疑問をすでに各所で提示したので、紙幅の関係からここでは割愛したい。

【付記】この「総括」はあくまでもシンポジウムでの3報告の内容に主に沿ったもので、本誌掲載論文に沿ったものでないことをお断りしておきたい。

(きくち かずたか・愛知学院大学)